

純心大学ニュース

(題字の色はスクールカラーの「ブルー」です)

編集・発行
 長崎純心大学
 広報委員会
 平成24年3月15日発行
 〒052-8558
 長崎市三ツ山町235番地
 TEL 095(846)0084(代)
 FAX 095(846)0737(代)
 URL
<http://www.n-junshin.ac.jp/>

巻頭言

再生への希望

学長 片岡 千鶴子

二〇一一年(平成二十三年)年三月十一日に起こった東日本大震災は、私たちに多くの問い掛けを続けている。その問い掛けに応え被災地に寄り添って地道な支援活動を続けている人々や、自分自身の生き方そのものを変えようとする多くの人々がいる。私立大学協会発行の「教育学術新聞」二十四年新春号の座談会では「復興なくして日本の再生はなし」とテーマを大きく掲げ、日本社会の再生に寄与する人材の育成に取り組む決意を表明していた。長崎純心大学は「東日本大震災被災者支援プロジェクト」を立ち上げ、昨年の十一月から十二月下旬にかけて四人一組、三グループが宮城県登米市米川ベースで三週間のボランティア活動に参加した。募集では百二十名を超える学生が説明会に集まり、被災地に寄せている関心の深さが示されたが、今回は現地の受け入れ状況もあり人数を絞っての参加になった。終了後は報告書を作成し、学内で報告会を開きボランティア活動の分かち合いを行った。

その報告書の中に次の言葉があった。
 「被災地に行って痛切に感じたことは被災



永井隆博士は1946年11月、仰臥のままの執筆生活に入った時、旧浦上天主堂の廃墟の傍らに木造仮聖堂の建築が進むのを目前に眺めながら、「平和」の文字を1,000枚書き続けて友人、知人におくり、「平和世界」の再建を訴えた。2011年は永井隆博士帰天60周年に当たる。原子野からの再建の祈りが東北地方の人々に届くことを願う。

した方々と被災していない私たちの間にある「隔たり」であった。同じ経験をしていない私たちが同じ気持ちになることは出来ない。しかし、その痛み、苦しみに心を傾けることによって「隔たり」を乗り越えたいと心から願った。何故ならば被災地の体験は他人事ではなく、私たち自身のことなのだ。被災地支援は自分自身が住む社会を支援すること、自分が住む国を支援することである。そこで生きる私たちは同じ世界で生きる一員なのだ。私はこの被災地から頂いた学びを共に分かち合い、共に生きて行きたいと切に願っている。」

この初回ボランティア活動に参加した学生たちが発起人になって「Little tree (リトル・トリー)」というボランティアグループを結成し皆に呼び掛けて長崎から継続的な支援を行うことが出来るようにするという。東北地方の被災地の人々と苦しみ分かち合うことを通して、学生たちが社会を再生していく希望の輝きとなることを祈っている。

～目次～

- 1 ……巻頭言「再生への希望」
- 2・3 ……学科より、国際交流
- 4・5 ……特集《自己研修制度》
特報「震災ボランティアに参加して」「上智大学に内地留学」
- 6 ……就職先から
- 7 ……ゼミ活動
- 8 ……トピックス「長崎純心大学ケアセンター扇町」